

Market Flash

発表日：2020年5月1日(金)

生き残るIT関連財

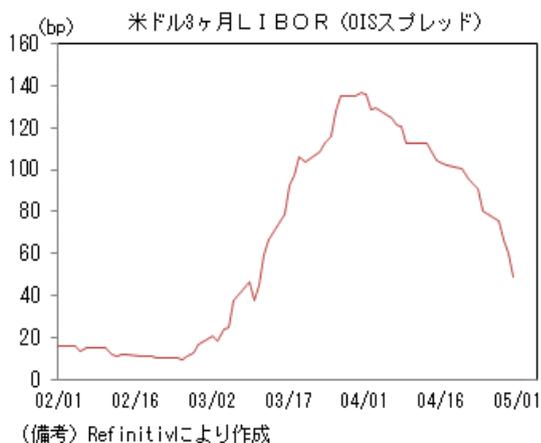
日本株の半導体一本足打法は変わらない？

第一生命経済研究所 調査研究本部 経済調査
主任エコノミスト 藤代 宏一 (TEL:03-5221-4523)

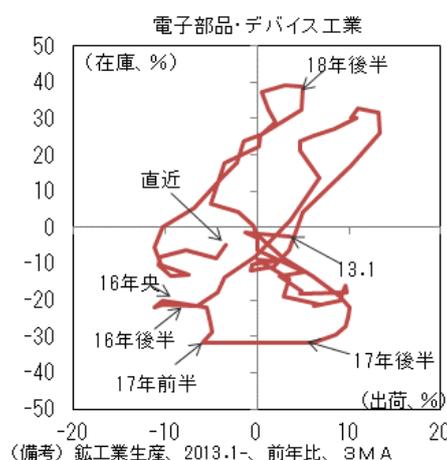
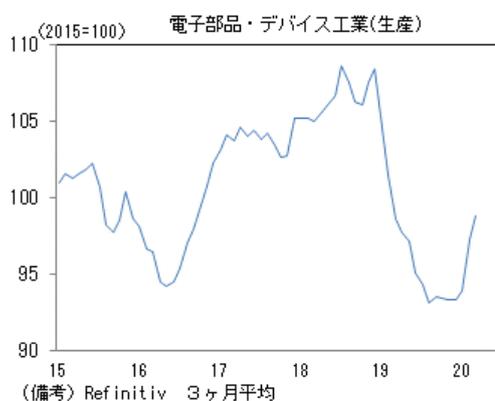
- ・日経平均の20,000円超定着には、6ヶ月程度の時間を要するだろう。
- ・USD/JPYは、先行き12ヶ月105程度で推移しよう。
- ・日銀は現在のYCCを長期にわたって維持するだろう。
- ・FEDはゼロ金利政策下で資産購入を継続するだろう。

< # I T 関連財 # 半導体一本足打法 >

- ・前日の米国株は下落。NYダウは▲1.2%、NASDAQは▲0.3%で引け。原油価格の安定が好感される反面、予想以上に膨れ上がった新規失業保険申請件数が嫌気された。VIXは34.2へと上昇。ECB理事会の結果に対する反応は限定的であった。
- ・米金利カーブはベア・スティープ。10年は0.639% (+1.2bp)、30年は1.285% (+3.5bp) で引け。短期金融市場ではドルLIBOR (OISスプレッド) が大幅に低下し、ドル流動性の回復を確認。USD/JPYは107前半へと上昇した。他方、EURは堅調。ECB理事会が資金供給オペ拡充を決定する反面、政策金利並びにPEPP (パンデミック緊急購入プログラム) を現状維持としたことが材料視された。理事会直後にEUR/USDは1.08半ばから1.09半ばへと上昇。商品はまちまち。WTI原油は18.84ドル (+3.8ドル) へと上昇した反面、銅は5188.5ドル (▲72.5ドル) へと下落。銅は中国の製造業PMIの低下が背景にある。製造業PMIは、Markit版が49.4、国家统计局版が50.8へと小幅低下し、何れも市場予想を下回った。金は1694.2ドル (▲19.2ドル) へと下落した。



- ・ B C (Before Corona) より半導体一本足打法の色彩が強かった日本株の傾向は A C (After Corona) でも変化がなさそうである。むしろ「モノ消費からコト消費」の流れが逆回転することで、その傾向が一層強まることも考えられる。
- ・ 3月の鉱工業生産指数によれば、電子部品・デバイス工業の生産は前月比▲4.0%の減産であった。もっとも、3ヶ月平均値では+1.7%と堅調。3ヶ月平均値は4ヶ月連続のプラスと基調的な強さが認められている。在庫循環図は、左下領域から右側領域への前進が持続。在庫が急激に積み上がっている様子もない。もっとも、3月の生産実績はそれ以前の受注が多く含まれているため、足もとで状況が急変している可能性はある。また短期的にはサプライチェーンの寸断によって生産が滞るリスクもある。とはいえ、5G関連の投資計画が撤回された訳でもなく、またそうした下で5G対応スマホ等の新製品の投入計画は、発売の遅延リスクに晒されながらも着々と進行している。中長期的なテーマは失われた訳ではない。
- ・ 世界的な雇用・所得環境の悪化を踏まえると、当初期待されていた民生用デバイスの成長は修正を迫られるかもしれない。しかしながら、本来は旅行、レジャー、スポーツ観戦等に向かうはずだったおカネが新型・高性能のスマホ、タブレット、PCなどIT機器に振り返えられることで意外な「特需」が発生する可能性もあるだろう。また、企業・国家レベルでテレワーク需要が高まっており、IT関連の実物投資が拡大する可能性もある。そうした下で日本の電子部品・デバイス（含む半導体製造装置）の回復が続けば、ACの日本株は、半導体関連銘柄の上昇に牽引されるのではないかと。



本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所調査研究本部経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命保険ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。